福沢諭吉著

現代語訳

西洋事情外編

三浦良　訳

二〇一六年六月三〇日

目次

題言……4

巻の一

人間……5
家族……5
人生の通義及びその職分……7
世の文明開化……9
貴賤貧富に別……12
世人相励み相競うこと……13

ワット略伝（略）
ステフェンソン略伝（略）
人民の各国に分ることを論ず（略）
各国交際……16
政府の本を論ず……18

巻の二（略）

巻の三

人民の教育……22
経済の総論……25
私有の本を論ず……31
勤労に別あり功験に異同あるを論ず（略）
発明の免許（パテント）（略）
出版の免許（コピーライト）（略）
私有を保護すること（略）
私有の利を保護すること（略）

題言（巻頭の言葉）

一　先に「西洋事情」三冊が世の中へ発表され、近々その続編の発行を求める人が多い。私は一八六七年の今年六月にアメリカから帰国した後、その原稿を起こそうとしたが、考えてみると、本編全体の箇条に沿って記すのは、単に各国の歴史や政治など一部のことを知らせるだけで、いまだ西洋の普通の事情を尽くしたことにならない。これを譬えると、柱礎屋壁の構成（建物の柱や礎石の構成）を知らずに、急いで家中の各部分をチェックするようなものだ。本編の冒頭に備考をつけたのも、もとはこの趣旨だったが、こういうことは私が一時の旅行中に親しく見たり聞いたりしたことを書きつけたものなので、書き漏れも少なくない。だから今、英国人のチェンバーズ氏の経済書を翻訳し、他方で諸書を抄訳して増補し、三冊になったものが「西洋事情外編」である。読者は上手にこれを「西洋事情」の綱領と考えて、本編の備考として参照すべきである。

一　チェンバーズ氏の経済書は、大きく二つに分けて、前段では人間交際の道から各国が別れて建国された理由、各国の交際、政府が起きた理由、政府の体裁、国法、風俗、人民教育等の箇条を説明し、これを「ソサイヤルエコノミー」とし、後段では経国済世の事柄を論じて、これを「ポリテイカルエコノミー」とした。

ところで先ごろ、社友の神田氏が翻訳した「経済小学」二冊を手に入れて読んだところ、第二段に載せるものとほぼ似ており、結局のところ似たり寄ったりの書物に過ぎなくなる。だから私は本章中冒頭の一団を訳して、そのほかの経済論の詳しいところは差し置いて、これを「小学」に譲った。ゆえにこの本を読む者は、必ず「経済小学」を参考にして、初めて全体の意味が分かる。ただし私がこの本の全部を訳さなかったのは、敢えてその労を惜しんだわけではない。目下のところ、文化はますます開けて、翻訳書も続々と世の中に出てきているが、もともと百花万端の学術について、有限の力しかないのに無限の書を読むようなものだから、たとえわが社の翻訳を専門にする者が分野を分けて精一杯の力を出し合って翻訳しても、その全体を備えることを期待するのは容易なことではない。ましてや今、にたりよったりの図書に無益な労を費やすより、その力を他の図書に使って、出来るだけ新奇有益なものを翻訳して、広く世の中に知らせる方がよい。これが私がこの図書の全部を翻訳しなかった理由である。今果してそれがよかったかどうかはわからない。「小学」に分業の便利をまかせるというのも、本当にそれでよかったかどうか。

一　書中に原本の順序に沿って項目を立てて、時折その他の図書を抄訳して増補しているのは、その文字を一段低くして本文と区別した。読

者は見過ごして混乱することがないようにしてほしい。

慶応三年丁卯冬　　福沢諭吉

巻の一

人間

人は生まれると、天から気力を与えられ、併せて性質も与えられ、人はその気力と性質によって、外物の特性に応じて身を守り、儚い命を終えるようになった。

外物が来るのに応じて、臨機応変に処置して、わずかの間の心配もなく、生涯の心配もない。これは人間にとって幸いなことで、むやみに喜怒哀楽の感情に流されて、激しやすい情欲に支配されることもなく、適宜に心身を使って望むものを得たり、欲しいものを得て、自身で満足を求めることができる。一般的に言えば、人は何かをすることが出来る存在である。寒熱痛痒風雨水火のように、人に害があるものに似ているが、却って人の気を引きたてて、その働きを励ます大きな助けになるものもある。自分に得るものがあってほしいと望む者は、まず自分の心身を働かせないではいられない。どんな苦労も避けてはならない。人は努力しなければ成功できない。

人間が初めて生まれた時は、もともと相交わる道を教える者はいなかった。ただ人が自然に望み人々の気配が赴く所に従って、知らず知らずのうちに交際の法則を作り、お互いに便利になったものだが、年月を経るとそのさまざまな法則のうちから至って当然なものを選んでついに一科学となし、これを「人間の交際及び経済の学」と名付けた。今その法則は、果たして理屈から当然出てきて変革できないものかどうかは定めがいたが、多くは世の中の昔からの実験を経てきて妨げないものである。世の人々は、「人間の交際及び経済の新法」を唱えて、これを放散する人も少なからずいるが、これらは人の狭い料簡から出ており、自然の人心に戻ることが出来る。故に、今ここで論じることは、ただ人の天性に従うことが基本である。もしこれに反して人間交際の道を立てようとすれば、必ず弊害が生まれる。

家族

人間の交際は家族から始まる。男女が一緒に暮らすのは人倫の大道である。子供が生まれて成人するまで、父母の膝元にいて養育されるのも普通の大法である。このように夫婦親子が団欒して一つの家にいるものを家族と言う。世間に人情に厚く、仲がいい交際は家族に優るものはない。

〇一家族もその子孫が栄えれば一族の人種になる。今一国に千百の家族があって、言語が同じで風俗も共にするのは、もともと一家族が繁殖したものと言える。もとより一国人民の由来を知ろうとすると、その調査は大変難しいことだが、おおよその体格と気質を見れば、その先祖が同じ一家かどうかが分かる。

夫婦が連添うのは人の幸せを増し人の交際を厚くするものだ。もとより天がそうさせるもので、人力がなせるものではない。鳥獣の類が子を産むときは自然と一時的な配偶者を決めて一緒にその子供を養うが、その子が成長すればその連れ添いを破り、雌雄牝牡の定めもなくなる。人の子は生まれた時は特に薄弱で、その成長もまた甚だ遅い。その時には父母は力を合わせ、心を同じにしてこれを育てるのは、自然な人の人情である。その子が薄弱で成長が遅いのは、創造主がことさらに意識的に人々が固く連れ添わせるための深意に違いない。

人がその子供を養育し、また保護し、その子の無病安全を祈って、子のために働き子のために苦労し、子供を導き教えるのは大変煩わしいことだが、これまでこれを敬遠することなく、子供に対して少しも差別しないのは、人としての人情、天の大道である。おしなべて外物と交わるに当たり、人として競争心を持たない者はいない。あるいはこれを人の私欲と言ってもよい。それなのに今、家に入って家族の間には競争しあい、互いに争い合う痕跡も見ないのはどうしてか。思うに、創造主の深意で、家族が仲良くする情愛を推し広め、世の中を一家族の如くさせようとする趣旨に違いない。このように、家族の間は仲よく快いものだが、その大本を調べると、きっと夫婦が互いに信じ合い、親子が互いに親しみあう人情があるためで、世間にもし連れ添いあう道がなければ、夫婦親子の情も失って、家族の幸福もなくなるに違いない。

一夫一婦が家にいるのは天の道で、これを家族と呼ぶ。そうすると大勢の夫や妻が集まるのもまた天の道である。このように人が集まり

交わるものを、一種族又は一国の人民と名付ける。禽獣はそれぞれ性質が異なり、あるものは群れることを好まず、ものさびしく一人で食事をする。またあるものは友を呼んで群れをなして、同じ巣穴に住んで食べる物も一緒にするものがいる。今人がすることを観察すると、その性質は群居を好み、お互いに交わり、助け合って世の中の便利を得ようとする性質がある。世の中の人がこの理屈を知らずに、独立独歩で世の中を渡ろうとする者もいるが、最後にはその身の幸せを失い、却って世間に害を与えるようになる。

大勢の人民の性情が同じだから、交際の道が世の中で行われても問題はないが、人々の了見は各々持ち前の物があって必ずしも一致させられない。故に人間の交わりを全うするには、お互いに自由を許し、互いに我慢しあい、時には自分の意見を曲げて他人に従い、お互いに平均しあって初めて好合調和の親しみが生まれることになる。

人生の通義及びその職分

天から人に生が与えられると、併せてその生を維持すべき才能も与えられる。しかし人がもしその天与の才能を活用するうえで心身の自由を持っていないと、才能は用を為さない。だから世界中で、どんな国でもどんな人種でも、人々が自分でその身体を自由にできるというのは天道の法則である。即ち、人はその人の人で、天下は天下の天下というようなものだ。人は生まれるや束縛されることなく、天から賦与された自主自由の通義は、売ることも買うこともできない。人としてその行いを正しくし、他人の妨げにならなければ、国法でもその身の自由を奪い取ることはできない。今給料をもらって人に奉公する者は、あたかもその身は不自由に見えるが、実態はそうではない。奉公人でもその身体はその人の身体で、労働の代金として給料をもらい、自分の身体の処置をする上で他からあれこれ言われることはない。

〇以上述べた自由の趣意は国の制度として許されるもので、これを人民普通の自由と呼ぶ。

天下のために大法を作るには人民を同等に見なければならない。子供といい大人と言い、ドモる子も富豪も、その生命の尊さは同じである。貧しい家の子の破れた衣服も、法でこれを守るに当たっては、諸侯の領地と比べてどちらが重いか軽いかという区別もない。人の進退、活計の道、遊楽の様子が違っていても、その人の意思に任されていて、他からそれを妨害できない。また、人は天性で自分でその身

を重んじたり愛したりする性質を持っている。これもまた創造主の深意から出ているものだから、人々にその天性を遂げさせないことは出来ない。これが即ち、万民同一徹の通義で、人が生まれながら持っているものである。そもそも人生に才能のあるなしがあり、時に幸運や不遇があって、同じ人間でも貴賤貧富智愚強弱の差がとてつもなく大きくつき、その形も同じようには見えるが、実際を見ると、生命を持ち、自由を求め、身を大切にして物を重んじているという通義を妨げることはない。

人が各々その通義の勢いを盛んにして天性を束縛されなければ、人はその職分を勤めざるを得ない。これを譬えると、家業を営んで税金を納めるようなものだ。自ら衣食を得るためまた家族のためにこれを払って、他人に心配をかけないように心掛けるのは、人としての職分である。世の中に法律があって、自分の体を維持し自分の通義を得ることが出来る故に、細部まで注意してその法律を守らざるを得ない。これもまた人としての職分である。もし人として自分が衣食住を得る道を知らずに他人の世話になりながらも、むやみに自分の通義を得ようとするのは、結局他人の功績を盗むようなものだ。こんなことでは世の中に一日も交際の道は存在しない。また、人々が法律に頼って自分の身の保護を求めたり、その法律を破ってほしいものを手に入れたり、守るべきことを守らないものが多ければ、世の中に一日も法律が行われることがなく、人間交際の道も一つ残らず廃却すべきものになる。

人間交際の大本は、自由不羈の人々が集まって力を出し合い心を尽くして、それぞれがその功績に応じて報酬を得て、世間一般のために設けた制度を守ることである。しかしこれを実際に行うに当たっては、人々の中には薄弱多病な人で、自分で衣食を手に入れられず他人からの扶助を仰ぐ者もいる。これは生まれつきの不幸なので、他から扶助するのは健康で元気な人の職分で、法律または人々の志に従い私的に衣食を与えることがある。あるいは窮状を救う法律を作ることもある。もともと生死が定まらない人間には避けられない不幸なのだから、これを助けるのは創造主の趣旨である。ゆえに薄弱多病で他から扶助を受けても、その本人は少しも恥じる理由はない。また身体健康で行いも正しい人が、精神を活動させようとしても、一時的な故障で思い通りにならないことがある。これもまた、相互扶助せざるを得ない。

〇以上は人の薄命不幸を処置する方法だが、本来人間の大義を論じると、人々はお互いにその便利を求めて一般のために仕事をし、正義を守り節操を知って、働いて報酬を得て、不羈独立で世の中に対処して、初めて交際の道を果たすことが出来る。

前条の議論をさらにはっきりと了解しようと望むなら、人々は自らを省みて、自分も他人と同様に、精神を働かせて世の中に存在していると考えるべきである。それなのに今、怠けて何もせずに世を渡ろうとするのは、他人に倍の苦労をさせて、密かにその功績を盗むことではないか。故に人として正義や節操を知れば、怠けていては自分で安心していられない。あるいはまた人の言葉に、自分は働こうと思ってもその機会が得られないと言う人がいる。しかしその実態を見ればこれもまた逃げ口上である。許せないことだ。およそ人の交わりは、兄弟や友人以外には、人のために斡旋してその**活計**を得させてくれる人はいない。それだけでなく、人の**活計**は臨機応変で、予め期待することはできない。自分から職を探して初めて安心できる地位が得られる。故に人間交際の道を全うするには、怠けることを禁じてこれをやめさせざるを得ない。あるいはこれを罰することもまた「仁の術」と言える。

また、人々が交際の道を存在させたいと思う時は、各人がその徳行を修めて法令を守らざるを得ない。野卑固陋（卑しく頑迷なこと）ば風習から抜け出て礼儀文明の世になるのは人が望むところである。だとすれば人々は徳を修めて法律を尊重して、世の中の文明開化を助けないではいられない。もしそうでなく、世の中の風俗を害する者は、その罪が仕事を怠けて他人の功績を奪うことと同じだから、これを罰して後難を予防せざるを得ない。その法律あるいは人々の評議でこれを処罰することがある。あるいは裁判所を設けて罪を決定することもある。裁判の方法は開闢以来世の中で行われており、これを遵法するのは世の中の人の職分である

文明の目でこれをみると、法律の中には不便なものもあるが、国の制度として施行されればこれを守らざるを得ない。もし暴行をしたい放題して法律を破るものがいれば、世の中に甚大な害を与える。すべて国法の趣旨は、人の通義を達成し人の生命を守り、事業を営み身を安心させることが根本だから、これを軽蔑して恐れない人は、自分からその愚かさを表明するのに等しい。もし実際に不便な法律があれば、国議によって穏やかに改正し、その弊害を取り除けば支障もなくなる。

世の文明開化

歴史を見ると、人間の初めは蒙昧（物事の知識が暗いこと）で、次第に文明開化に向かって進む。蒙昧不文（知識に暗く文明的でない）の世では、礼儀の道はまだ行われず、人々は自分で血気を抑えて情欲を抑制することができない。大が小を犯し、強が弱を虐待し、配偶

者の婦人を奴隷の如く見做し、父が子供を無道の如く扱っても止める人がいない。かつ、世間もお互いに信じ合う意識が薄く、交際の道も極めて狭いので、制度を作っても、一般の利益にならない。世の中が文明に向かうにしたがって、この風俗も次第に止んで、礼儀を重んじて情欲を抑え、小は大に助けられ、弱も強に守られるようになって、人々もお互いに信じ合い、自分だけを顧みるだけでなく、世間一般のために便利を図る人が増えた。

○或る人は、昔の野蛮な人は水草を追って住みかを変え、その出処進退を止める人もなかった。人間交際の道が世の中で行われるようになって、人の性質心情を直したが、人生最大の自由は野蛮の時代にあった、と考える人もいた。しかしこれはその一を知ってその二を知らない者の意見である。野蛮の時代の自由はあたかも人を餓死させる自由で、力で暴虐をほしいままにする自由である。罪を犯しもて罰を受けることがない自由である。どうしてこれを真の自由と言えようか。文明開化によって法を設けて広く世の中で実施し、初めて真の自由なるものが見えた。

またある人の説に、野蛮は自然なことで、文明は人為的なものと言う者がいるが、結局のところ、言葉の意味を誤解した意見である。文明の世に行われる事物で、一つとして天然から出ていないものはない。世の中の開化を進め、法律を設けて、その法は寛大だけれどもこれを犯す者もなく、人々も力で抑えられるのでなく心で抑えられるのが文明の有様で、即ち人が生まれながらにもっている性質である。これを人為的とうべきではない。昔の未開の時代には、その風俗も自然に生まれたものが多かったに違いないが、今その風俗が昔のままで進歩がなければ、きっと外物との故障があってそうなっているので、却ってこの方が人為的と言える。その証拠に一例をあげると、野蛮で未開の人は衣食住ともに不潔だが、文明開化の人は清潔である。今人がその天性で汚れを好んで清潔を憎む人がいるだろうか。そうすると野蛮未開な人が不潔不清潔であるのは、いまだに人間の天性を伸ばすことが出来なくて、譬えると生まれたばかりの子供にまだ才力の兆しが見えていないようなものだ。

野蛮未開な人は必ず天然に従い人為を用いないと思うのは、大きな誤解である。某国に一種の野蛮人がいた。その風俗は頭が低いことを尊び、子が生まれると頭の上に板を結び付けて頭の形を作った。また中国では、文明の教えもまだ広まっていないので、半開半化の国と言える。その風俗に夫人の足が細小なことが美とされ、女子が生まれるとその足に狭い鉄の靴を履かせて、その自然な形を作らせない。これらは皆、人為によって天然を害したものと言える。今真に文明開化と唱える国では、このような甚だしく天然を害するものは見られ

ない。

諺に、人は文明になって初めてその美を尽くすという。野蛮未開の国では土地の広さに比べて人口がきわめて少ない。平均して一里四方に一人より多くない。その理由は食料が不足することによる。文明国では耕作を進め牧畜に励み工業を営んで、人口も次第に増して、平均して一里四方に二五〇人になる。また未開の人は老人や幼児を養う方法を知らず、かつその生活も辛い苦しみに耐えることが多いために、多くの人は短命だが、文明開化が進むと次第に人も長寿になってくる。イギリスでは百年以来の人の死生を計り平均すると、国民の寿命は次第に伸びたという。

世界中の人口八億五千万。これを世界中の土地で平均すると一里四方に十七人の割合になる。また　人の寿命は平均すると、三十三歳となる。中には
これに　二倍、三倍になる人もいるが、百歳以上生きる人は大変稀である。故に若死にもあわせて三十三歳が平均寿命とすると、三十三年間に世界中で
死んだり生まれたりするものは八億五千万、一年に二千六百万人、一日に七万人、一時間に三千人、一分ごとに五〇人の割合になる。

そもそも文明開化を唱えるイギリスでも、その教化はいまだ全国に至っていない。文字の教育を受けずに無学文盲な人がいる。放蕩無頼で罪を犯す者もいる。また辺鄙な土地では昔からの怠け癖の風潮にふけって、文明の味を知らない者もいる。しかし、これらはすべて文明世界中の野人だから、最後には文明の風になびき、文明の徳に教化されて、一緒に天地の歓楽を受ける日が来る。

前条の如く、文明の世界にいてその教化を蒙らない者は、本来世の弊害だが、この弊害は文明が盛んになるにつれて、自然と除かれるものである。又文明が進むにしたがって、一緒に生じる一種の弊害もある。この弊害を救うには、外にその方法を求めざるを得ない。今その一，二をあげる。文明の教えが盛んになると、世間も豊かになって、そのために貧乏人の心を煽動して悪事に陥れることがある。文明の弊害である。機構の制度も次第に精巧になり、それに伴い商法も趣を変えると、旧来の工商は一時に仕事を失い、衣食に窮する者も少なくない。これもまた文明の弊害である。今この弊害を救うには、世の中の人々に世の形勢を了解させて、その心と力を使って新しく衣食が得られる方向へ導くほかに方法はない。およそ人として勇気と廉節を守り、力を尽くせば、たとえ競争しあう世の中であっても、**活計の道**を得られるのは疑いない。即ちこれが文明の世界に求める**活計の道**である。

貴賤貧富に別

前に述べたように、人の生命を維持し自由を求めて、身を大事にして物を持つ理由は、だれも同じで違いもないが、人の気質と才能になるとそうではない。鋭い才知があって活発な人がいれば、愚かな怠け者もいる。あるいは勤勉に勉強する人がいれば、贅沢をして遊興にふける者もいる。又強い者、弱い者がいて、人々の天性は必ずしも同じではない。それだ加えて、今ここに二人がおり、その天性に少しも優劣がないといっても、片方を教育して他方を放っておけば、その人物はたちまち変わって、天と地ほどの違いが生まれる。これが貴賤貧富の分かれる理由である。要するに、人が知らないことを知る人は人を支配し、人が知っていることを知らない人は人に支配されるという道理である。世のために苦労して功績を立てた人へ爵位を与え、あるいは装身具を許してその功績を顕すのは、各国の風俗で、本人もそれを栄誉とし、更に他人を励ますうえで大きな助けになる。あるいは国の風俗で、功績があった人でも装身具を与えない国もあるが、彼を尊ぶ気持ちは万国共通の人情である。

以上のように功績があった人へ爵位や装身具を与えるのは、本来当然のことで、人々も許すが、これを子孫に伝えるのは道理に合わないという人がいる。しかし昔から、諸国で功績があった人が一たび爵位を得れば、その子に功労はなくても、父のおかげを受けて代々爵位を伝える風習になっているのはどういうことか。学者がもしここに疑問を持つなら、詳しく人の人情を観察すべきである。そうすると大きな発明をすることもあり、その風習が無理なことではないことが判るだろう。

おしなべて世の中の人は、晩年になって自分が所有するものを処置しようと思うと、それを与えるべき人は必ずその子供になる。もともと父子の間は同身同体なので、父の命が終わってもその子が代わりに跡を継げば、あたかも薪が尽きても火が消えないようなもので、ただその時代を一新するだけで、父の身体は依然として存在しているのと同じである。子が父の生命身体を授かって受け継げば、その他の遺産を受け継ぐのはもとより当然で、ことさらに疑いをはさむべきことではない。加えて、世間の人も同情し憐れんで、それを許さない人はいない。父の身体を受け継ぎ、さらに遺産も受け継げば、ただ一つ爵位だけを受け継がないということも、人情として行われ難いこ

とで、ついに爵位も家産などの遺産とともに子孫に伝わる風習になった。これが世の中で功績もないのに位を保ち、名実に食い違いが生まれる理由である。

世の中の人々はこの風習を大いに道理に合わないといって議論する人も少なからずいるが、世間の人情を見ると、爵位を受けた父の跡を継いだ二代目の人も尊敬するのは初代の人と変わらない。それだけでなく、代々時代を重ねるにしたがってますますこれを尊ぶようになる。思うに、この人情は、人が古いものを尊ぶ気持ちから生まれるようだ。世間の人が何気なく言い伝えることがある。某は血統が十二代目の名家で、今急に努力して起き上った門閥ではない。世に昔の君主を尊敬するのもこの人情である。世の人々の内には、文武を兼備する才能があって国家を支配すべき人物も少なからずいるが、人心を集めることが出来る門閥もまれなことだから、徳があっても必ずしも天下を取ることが出来る人ではない。現在世界中の国々で、多くは国王又は貴族が政治を行っているが、それは自然な人情から出ているもので、偶然なことではない。

世人相励み相競うこと

一種の情愛があってお互いに身を捨て物を捨てて遠慮しないのは家族の間柄だが、一旦家を出て世間を見ると、そのような情愛がある所はなく、人々は自ら我が道を行き自分の仕事に勤め自分の思いを達成しようとしてみんな先を争っている。これが「世人相励み相競う」の性情で、世のために役に立つことが少なくない。世間にもしこの人情がなければ、力を尽くして功名を立てる人はいない。

前条のように、自分の幸福を求め自分の思いを達成し**自分の活計**を求めて他を顧みないといっても、自分一人の私欲を恣にしても他人を妨害をする心配がないのは、文明がそうさせるのだ。今教養のない野蛮人の群集の中へ、一片のお金を投げ与えると、その群衆はたちまち上下大騒ぎになって、互いに争って。顔に傷をつけ目を掻きむしるなどその醜さは見るに忍びないが、文明の世ではそうではない。人は皆道理を知り、礼儀を重んじる故に、人を傷つけて自分の思いを達成することはない。野蛮で文明がない世では、人を傷つけなければ自分のためになることがなかった。故に心身活発で何事かを成し遂げる者はいつでも盗賊だった。文明の世ではそうではない。富貴利達（出世して金持ちになること）を達成する人は常に他人にも利益を与える人である。

富貴利達を達成するには二つの道がある。その一は他人の物を奪い取ること、その二は自分の力で新たに事業を起こすことである。武力を貴んで力を恐れる国で金持ちになるには他人の物を奪い取る以外に方法はない。故に、野蛮未開の世で金持ちを見ると、必ず他人に損害を与えた人である。即ち戦争を起こしてみだりに他国を攻めとって、盗賊同様の挙動をして富貴になるものがいる。又国民を奴隷の如く働かせて、その血と汗を吸い取って富貴になるものがいる。これらは皆、他人に損害を与えるものである。

東洋諸国では、今の時代になっても暴政をほしいままにし、一時の私欲で金持ちの財産を没収することがあるので、たとえ実際は金持ちでも、金持ちらしさを他人にみせるのは自分の身のために大変危険である。ヨーロッパでも昔の封建時代の世襲の家禄の乱世では、人々は安心して事業を営むことが出来なかったので、財貨を集めても密かにこれを溜めていたので、国内の貴族たちはこれを見つけ出して無法に奪い取ることがしばしばあった。実にこの時代では、世襲の武士たちは穏やかに仕事を営むことを恥と思い、乱暴を恣にして、人々が蓄えておいた財貨を奪い取ることを少しも遠慮がなかった。

このように、天下が武力を貴び、互いに先を争って富貴利達を求めるのは、「人生相励み相競う」の趣意に似ているが、実際は時勢の弊害で、これを世の繁盛とは言えない。文明の教えが少しづつ行われ、人々も徳行を修めて知識を磨くようになって、世の中の形勢が全くその趣を変えて、人々が自分から利達を求めれば、共に他人の利達も図るようになり、人が自分から裕福を求めれば、自分の力で行って、他人の物を貪ることもなくなった。故に近世で蒸気機関の仕掛けを作り上げて蒸気車鉄道を発明したワット、ハルグリーブス、アークライト、ステフェンソンの如き大家も、その発明で自ら高名利達を得て、併せて世の中のために大きな利益を生んだ。それだけでなく、その大発明を脇から助けてその目的を達成させた人も自然と名利を得て、ともに世の中に利益を生んだ。

そもそも文明の世でも、人を傷つけて自分のためにし、人に損害を与えて自分の利益にしようとする人もいないわけではないが、そのような卑しい人物は、多くのことはできない。かつ、文明開化の制度において許されないものだから、常に戦々恐々として、その世渡りの様子はとても見苦しいものである。

以上あれこれ論じたところから見れば、人生は互いに害を与えずに、各人が富貴、青雲の志を達成し、加えて互いに励み競い合って世の中に利益を作り出すことが出来る。故に家族の間は親愛慈情を主にして、競争し合う気持ちがないのは、老幼小弱を助けるためである。世の中の交際で、互いに先を争って利達を求めても弊害がないのは、世界一般の利益を生もうとするためである。これはすべて創造主がそうさせているもので、その心つもりの巧みさがわかるというものだ。

故に世の人は、もし悪事をせず知力を用いて功名青雲を志す人がいれば、それを許して滞りなく進むのを妨げてはならない。しかし秩序を乱して利達を望み、熱中する欲望に乗じて節度を失うばあいは、青雲の志も野心に変わり、人に利益を与えず損害を与えることが少なくない。このような人の筋道を誤解する理由を見ると、初めに私欲を大いに得ようとして望みを失い、ついに終身の心がけを誤ることになるので、人たるものは事の初めを慎ましくすべきである。そもそもこの世の人々の中には、不義だが富んで貴い人もいるが、もともと天道人理の大義に反することだから、これを智恵とはいえない。かつ文明が盛んになるに従い、世間一般のために大衆の利益が平均される風俗になるので、そこにいて他人に害を及ぼし一人自分だけの利益を貪ろうとすれば、必ず自分の力が及ばないことがあるに違いない。

人生は先を争って自分のために物事をすすめるようだが、事をなすのは必ずしも一人の力ではなく、常に他人と交わりを結んでそれを一緒にすることが多い。もとよりその交わりは、他人との交わりだから、家族のように親愛の情により互いの違いもないわけではないが、互いにその緩急を救い歓楽を共にするという趣意だから、人間に欠かせない交わりである。

ワット略伝（略）

ステフェンソン略伝（略）

人民の各国に分るることを論ず（略）

各国交際

各国が自立してその国を守り、その領土を失わないのは、多くは兵力による。太平無事な時に各国は互いに奪い合う心配もないが、一旦戦争が始まると、至る所で侵攻略奪が始まる。殊に野蛮で未開な国では、人が頼れる制度もなく、そのむごたらしさはもっとも酷い。他人から被害をこうむった者は、知り合いや友人を集めて自分から仇を返す以外に方法がない。諺に、有力者は非を理に変えるが、無力者は常に被害を受ける、というのが、これである。文明開化の教えが次第に世の中で行われるようになって、制度や法律が次第に明らかになるにしたがって、その弊害も次第に止むが、各国交際の様子は、今日になってもなお、昔の野蛮人が互いに道理に暗い男が勇ましさを争うのと変わらない。故に今文明国と称する国でも、ややもすると戦争を始めて人を殺しお金を使い、その被害は計り知れないほどだ。実にため息が出る話である。

文明の人は、その政府に服従することの便利を知っており、かつこれに服従せざるを得ない理由も了解して、自然と政府の権威もついて、その国内も治まるのだが、もとより独立国だから他国に従うこともない。故に小国は大国に侵略されることを心配し、また大国と言えども礼儀知らずに乱暴を恣にすれば、小国が連合して攻めて来る恐れもある。このような次第で、各国の間では常に論争が止むことなく、ともすれば軍事力で自分の目的を果たそうとする者もいて、その交際はとても危なっかしいが、世の中にまだ一定の明確な完全な権力がないために、その争いを防ぐものがない。

世の中の文明が進むにしたがって一つの法律を作り、これを万国公法と名付ける。そもそも世の中に一種の完全な権力があって万国も必ずその公法を守るべしと命令を下すわけではないが、国としてその公法を破ると必ず敵を作るために、どの国でもこれを順守しないわけにいかない。各国の間で、互いに使節を派遣してその国へ駐在させるのも、その国々がともに公法の趣意を忘れることがないようにするためである。故に両国間に憎しみがあっても、使節は敵国に駐在してことさらに被害をこうむることもない。戦争が始まると、これを本国へ送り返すに過ぎない。このように敵国同士の間にも自然と礼儀があるのは文明によるのだが、昔はそのようなことはできなくて、ト

ルコなどは他国と戦争するとまず使節を捕まえることがしばしばあった。

ヨーロッパ諸大国の間には、国力を平均するといって、世の中の平和を保つ大きな助けになった。今ヨーロッパで大国と呼ばれる国は、イギリス、フランス、オーストリア、プロシア、ロシアである。その国力が平均し優劣がない理由は、もともと互いに羨んだり嫉妬したりする感情から出るもので、例えばこの五大国の中で、イギリスがスコットランドを併合したように、二国を統合しようとすると、他の三国がそれを心配してその統合を妨害する。千七百年代の初めにフランスとスペインが統合して一国にしようとしたが、各国は軍隊を出してその計画を毀したことがある。このように各国が互いに羨む勢いがあって、それが小国にとって利益になることが少なくない。つまり大国間の争いは小国には幸いである。もし今オーストリアとロシアが力を強めれば、たちまち近隣の小国を併合することが出来るが、他の諸大国がこれを妨げ、あるいは軍事力でその強暴を抑えるので、小国もうまく国を維持して侮辱を受けることもないのである。そもそも今諸国の形勢を見ると、右に述べたように、ただ国力の平均だけで争いを抑えるのには十分ではない。近年、ロシア、オーストリア、プロシアの三大国が一緒になってポーランドを滅ぼしてその土地を分割し、またオーストリアはイタリアの小国を奪い取るなどもしたが、他国からこれを非難することもなかった。これもまたどうしようもない悪弊だ。

前条で述べたところからみると、各国政府の不正強暴を抑えてこれを全くやめさせる方策があるわけではない。これが世の中で戦争がなくならない理由である。文明国では、二人の間で争論があって闘おうとする者がいても、政府の法律によってこれを止めて争論を抑えることが出来る。すべて文明の教えを受けた者は、戦争が不幸な出来事だと知り、努力してこれを避けるが、外国との交際になるとそうではない。何か事件が起きることを好む者がいて人心を煽動し、あるいは君主が功名を得ようとして野心を欲しいままして戦争を好む者もとても多い。故に今、ヨーロッパ諸国は、礼儀や文物で自慢しても、戦争のタネはなくなったことがない。今は文明開化の楽園と称していても、明日は悲惨な流血の戦場になるかもしれない。世の変遷が激しいという「桑田変じて海になる」の比ではない。

文明の教えをもってしても、まだ戦争の根源を止められないといえども、少しはむごたらしい被害を緩やかにすることはできる。アメリカの土人などは、その敵を殺すのに残酷凶悪の極みを行う。夜間に村を襲って夫人を犯して子供を殺すなどはこれまで卑怯な行動とは考えておらず、自分から好い機会を得たとしていた。文明の戦争はそうではない。罪がない夫人や子供を殺すのは恥で、敵の政治家を討ち

取って敵の人民を殺さないことを戦争の趣旨にしている。だから敵と戦う時は、必ず敵の兵士と向かいあい、敵国を討つときは必ずその城を攻めた。村落を襲う時もいたずらにその民衆を殺すだけでは進攻の目的を達成するのに不十分なので、直ちに首都へ進み、その政府に迫って勝敗を決めた。

かっては、各国の政府は困難を凌ぎ危険を冒して隣国を侵略して自らの勇ましさを誇り、隣国に罪人がいればそれを隠し、隣国に借金を負った人がいれば彼を助け、あるいはまた隣国に騒乱を起こすべき由緒がある人がいれば、お金を渡し、軍隊を派遣して彼を支援した。ゆえにイギリス王スチュアートの家系が断絶した時も、フランスではその家系の人を助け、数十年間、イギリスの心配の種になったことがある。ヨーロッパの昔の事情はこのようなものだとはいえ、近年では次第にその悪い風習も取り除かれて、各国は互いにその人民のためを考えて助け合い、互いに支援しあって国を立てるようになった。

イギリスで貿易の法を一新して貿易を緩和したことで、諸国の交際はさらに懇親を深めた。イギリスの貿易が盛んになるについて、各国の人民はイギリスに物を売って利益を得るものが多かったために、これと戦争することは好まず、さらに各国の間でも戦争があれば、自ずからイギリスとの貿易が妨げられて、それによってその人民も損失を被ることを知っており、平和で無事なことを祈る人が多い。故に今、イギリスの貿易がますます盛んになるに従って、各国の戦争の禍もますます少なくなっている。それだけでなく、イギリスでは貿易を盛んにして国内も繁栄しているので、各国の政府もそれにならって商法を寛大にして、各々の便利をよくしてますます文明開化の教えを広げ、ついには天下無窮の大平を見るようになる。故に、各国の戦争の原因を絶つには貿易の法を寛大にすることだ、という。

政府の本を論ず

前に述べたとおり、人の天性は異なるものが多い。ある者は体格がよく健康だが、ある者は進退虚弱、またある者は才知の働きがしっかりしており、ある者は心が怠け者で、またある者は先立って人を支配するのを好む者もがいる。また人のあとについて人に頼って何かをしようとする人もいる。未開野蛮な民間では、この天性の違いは特に著しく、生きる上で害になることもよくあるが、文明が進歩するに

したがって次第にそのばらつきを一致させ、あるいはこれを完全に一致させることは出来なくても、そのばらつきで世の中で被害を受けることなく、かえって禍を転換させて幸福に変える処置を施すこともある。

未開で野蛮な国では、強い者は事をなすのに思い通りにならないものはなく、弱い者はただその命令に従うだけだ。今トルコの役人に向かって礼を失する下男がいれば、剣を抜いて切り捨ててかなわない。今から百五十年前には、スコットランドの北方でその酋長が部族の少民を切り捨てたことがあった。また数百年前の封建の世襲制の時代には、それよりもずっと残酷だった。ゲルマンの一諸侯が、厳冬の夕刻、猟から帰り、手足が寒いといって家来を殺して腹を裂き、鮮血滴る腹の中へ両足を入れて温めたことがあるという。その残忍さは全く言葉で表し難い。いま仮にイギリスで富豪の貴族が一人の少民にあって、その服をはがして自分で着たら許されるだろうか。たとえ身分が高い大家であっても。きっと罰を受ける。文明の恩恵である。

天性が不幸にして人に及ばない典型例は、五官を欠くことである。即ち、盲、聾、唖である。野蛮な国では、そうした不幸な人は道端へ捨ててかまわず、酷い場合になるとわざわざそれを殺す者もいる。支那の如きは、全く開化をしていない未開国ではないが、それでも盲唖についてはそれを捨てたり殺したりする悪習がある。文明開化の国でそんなことはない。生まれつき不具の人がいたら、単に命を保護するだけでなく、ものを教え、不具を補って健常人と同じようにするように努力する。故に盲者に書を教えるのにその文字を作り、聾唖者に言語を教えるのにその道具を作るなどその善行は驚くほどだ。アメリカに一人の女性がいた。名前をローラ・ブリードマンという。目は見えず、耳は聞こえず、口でものも言えない。それでもしっかり文字を理解し知り合いに手紙を贈ることが出来る。故に目や耳は人に及ばないが、その精神はしっかり宇宙の法則を理解し、世界人類の情に通じている。

世の中が開けるに伴い、小弱無力の人は、協力し合って世の中の道理を理解し、生命を保護する方策を講じて、これを国の制度と名付ける。元来制度の目的は、強弱智愚にかかわらず、各人が安心して生命を守りその私有を維持する趣旨だから、無謀過激な連中はこれを嫌い、その法を破ろうとしたが、大勢の人には歯向かいできず、ついに道理によって力を圧倒し、一定の制度を実施することができた。これが世の中に政府が生まれた本源である。政府とは人心を集めて一体にして。力を使って大衆の思いを実現させるものである。

未開の初めでは、先に法を作ってその後に人を支配したか、それとも人々の交際があって自然に法が生まれて来たのか、その前後はわからない。しかし、人がいれば必ず法があるわけでもないので、人間交際の初めから同時にその法も定まって、両方がともに進歩してきたものなのだろう。地球上で人間が集まるところでは、人々は互いに通義を知り、どこでも自から一種の政府を立てた。アフリカの南方に、ポスマンという一種の野人がいる。その民衆はこれまで世の中に政府があることを知らないといわれた。しかし、政府がないのはもともと土地が広くて人口が少なく、集まることが稀だったためである。野人の中にも自然と人望を得て人を従わせる人物がいないわけでもなかった。又オーストラリアを発見した時には、人はみなその国内に政府のようなものはないと思っていたが、その後人口が多いところへ行って見ると、やはり首長がいた。その他アメリカの土人にも首長がいた。ニュージーランドにも、昔は土地の王と称する者が数人いたという。

人間は群れをつくると、必ず一種の政府を立て、その取締を始める。欠かせない急務である。今国法を犯して徒党を組んで悪だくみをするものを見ると、その中にも自然と法則がある。それは盗賊の政府である。また橋の下に住む孤児にも、大勢集まると自然と法則を作って互いの便利を図る。これが孤児の政府である。昔イタリアに強い盗賊がいた。その頭は黄金と玉で衣装を飾り、配下の者に号令するのに大変威厳があったという。

未開の初めに政府を立てて法を作った様子を推測すると、その概略は以上のようだった。身体強健で強い精神力を持った者を首長にして、年長者で事物に熟練したものをはかりごとを考える中心人物にして、日々戦闘を繰り返し、小弱未熟な少年はその首長に仕えて礼を尽くし、それによって他人からの侵略強奪から逃れて、人口もだんだん増え居所も定まって来て、制度法則も次第に正しい道理に向かった。世間の評判は、私欲を欲しいままにして、ややもすれば乱暴な挙動が多い。血統の子孫に家を伝えるのは昔からの風俗だが、その時の時勢に応じて、今の世で行われる相続方法と趣が異なることがある。たとえば、昔スコットランドの王が死んで幼少の子がいても、その子を立てずに年長の弟に位を伝えた。きっと騒乱の世にあって幼君では任務に堪えられなかったためだろう。またヨーロッパ諸国の歴史を見ると、国君と称する者でも、初めは単に一種族の酋長だったが、次第に土地を押収してついに一国の人民の上に立って政治をする者がいる。

以上のように国君の成立はその事情も曖昧だが、数百年間、代々伝わって自然と門閥の名前を得て、それ故にさらにこじつけのような説を作ってますます威光を輝かそうとして、あるいはこれを天から頂いた爵位と呼んでいる。近世になるとその代々の歴史も長くなって、その地位もますます強固になり、容易にそれを動かせなくなる。もし無理にこれを動かそうとすると、国の制度まで変動させる勢いにもなる。そもそも一国の中には人物も少なくないので、家柄にかかわらず、才徳あるものを選んで王とし、国政をさせて支障ないという道理だが、立君制度で国を治めようとするには、国内で人望を得た名家の子孫を奉り上げて、あたかも彼を家族の総名代として君主の地位に置いて、人心を維持することに優るものはない。これはいわゆる道理以外の便利である。

政府の体裁は各国で異なるが、その大きな趣意は前にも言ったように、人心を集めてあたかも一体にして、人々のために便利を図るよりほかにはない。国政の方向を示して順序を正しくすることは、一，二人の家臣や議政官の手でなければできないので、人心を集めて一体に出来ないわけではない。民衆の便利を図るにも、人心が一致しなければ、多数に損害を与えて少数を利する心配があるために、これもまた政府から処置せざるを得ない。本来諸国で政府を立てて国民がこれを仰ぎ見てそれを支持する理由は、ただ国内一般に恵みを受けようと望む趣意だから、政府たろうとするものも、もし国民のために利益を図ることがなければ、それは有害無益な無駄なものといえる。中でもその職分で最も肝要なことは、法を平等にして規律を正すことにある。これが人民の生命を安心させ、自由を得て私有の物が持てる理由である。故に政治をするのに、誠実を主にして公平を失わなければ、たとえ一時的な過失があっても、その政府に従わざるを得ない。

巻の二　（略）

巻の三

人民の教育

人は生まれた時は無知である。子供がものを知るのは教育による。子が生まれると父母はその子を教育してその子の知識を増やす。父母の教育を受けたあとは、次に学校へ入らねばならない。故に国の政治の急務は、学校をつくってそれを支援することが最初である。人民は幼い時に勉強せず、成長した後に知識がなければ軽挙妄動な行為をし、最後には罪を犯して、人間交際を損なうことが多い。

人に知識を教育しても、必ずしも道徳上の義務を養うことが出来るわけではない。昔から頭がよくて賢いことで有名な学者でも、却って大変な悪者で道義を欠く者も少なくない。しかし、教育の方法がうまくいって、徳のある行いをして聖人の教えを実行する時は、また徳ある聖人が現われたようだ。また世間に悪事の悪たるを知ってわざと悪を犯す者がいたら、速やかに彼を罰して、その罪を許してならない。そういう連中は罰を受けても、その罰がふさわしいとして甘んじて罪に伏して、過去の過ちを改めるようにすべきである。しかし、知識が乏しく事柄の良し悪しを区別できない者を罰することになると、その処置はとても難しい。その罪を見てすぐにこれを罰するよりも、その人にまず事柄の是非を説明して罪を犯さないようにするのが、いわゆる真の刑法である。人を罰するより、人に教えて役立つことが判れば、どうしたら彼を無知でないようにできるか。教育のない民衆を罰することはひどく残酷なことといえる。

法律がうまく行われる政府では、国に罪人がいれば捕らえて、夜盗、詐欺、強盗なども捕まってその罪状が明白な時は、これを刑に処して国の法律に従わせるべきだが、国に無知文盲の人が多い時にはその害がひどいのは言うまでもない。この連中は善悪が分からず、正邪も判らず、国法によって私財を保護する理由を知らず、一旦国に騒乱があるとそのすきに雲のように集まって蜂起し、法も恐れず人目もはばからずに残酷で凶悪なことをする。その一例をあげると、昔フランスの騒乱の時に、恐るべき暴行を行った連中は、皆無学、文盲、放蕩無頼で、良い政府の本では活計を営むことができない連中だった。

貧民の救済のために多額のお金を費やすのは、その原因を調べると皆人民が無知なためであることが判る。人に知識がなければ、必ずしも先のことまで配慮できない。先のことを配慮しない者は、目前の忙しさに追われて、最後には言葉で言い尽くせないような悪行を行うことがある。第一に摂生の方法を知らず、節度ある飲食をすることを知らず、人に交わる方法を知らず、恥を知らず、そうして世の中の風俗を乱して、一緒に貧苦の境涯に陥る者が多い。

人に知識がないと、労働の真理を知らずに、貧乏に苦しむことが多い。あるいは力仕事に似ているが、その方向を誤って道理から外れた道へ入ったために、働いても効果がない。あるいは、その土地にいて活計の道がなければ、他国へ行って活計を探すなど、他に身を安らぐ方法がないわけではないが、頑張る意欲がなくて怠けて、貧乏に甘んじて苦しむ者も少なくない。スコットランドの西部に住む野人の如き者がこれである。この野人はひどく無知である。常に貧困で、中には餓死する者もいる。それなのによそからこの貧民を雇って使いたいと欲する者があっても、無知がやることはどうしようもないのだが、郷里を離れることが出来ず、イジイジとして家に止まり、終生貧苦の苦労をなめている。

昔から、様々な新発明が世間の役に立っていることは言うまでもない。しかるに無知で頑固な連中は、その発明や工夫を奇異な妖怪の如くに考えた。少しの人数で徒党を組んで精巧な機械を毀し、あるいはその発明家の善行に感謝しないで却って侮ることがよくあった。これもまた無知文盲のために起きたものだ。この連中はもともと機関がどんなものかも知らず、ひたすらそれを有害無益なものと考えて、そのために世間一般に人にとって恩人である発明家も、被害をこうむることが少なくなかった。昔フランスのパリでコレラ病が流行した時、街の医者が皆力を尽くして救おうとした時に、大衆はコレラがどんなものかも知らず、みだりに医者を攻撃して、医者が毒薬を使って人を害していると人殺しのようにみなし、しばしば医者を冒とくしたことがあった。又医学研究のために死体を解剖するのを見て、無知な市民はこれを医学生の犯罪と考えた。

新式の工夫が世の中で行われ、あるいは時代の流行が変わるにしたがって、人もまたその職業を改めざるを得ない。その時に、事物の道理に通じ、機械学の趣旨を知る人は、時代の変化に伴い上手に仕事を変えていくが、無知文盲な人はそうではない。古くからの仕事を固

守して時代の変化を知らず、座ったまま他の新しい工夫のために苦しめられるだけである。そもそもそうした愚か者の気持ちには、旧来から自分が守ってきた職業以外に天下に活計の道はないと考えている。だからもし、その人がに少しでも物理が判るようになって活計を探せば求めやすいことが判り、旧を捨てて新につき、貧困の苦労から逃れられるのだ。これを一国の規模で行えば、救貧の費用を省く大きな助けにもなる。

少しでも教育を受けた人は、知識の尊さを知り、知識を養うために努力し、財産を使っても教育に努める意思があるが、無知蒙昧な連中は全くその味を知らず、人を教育し知識を養うことになると、全く関心もよせない。これはすべて無知無学ゆえに生じる大きな害である。愚かな夫婦が子を捨てて子の教育をしないありさまを見ると、その心の中に驚かされるし、また憎むべきである。単に教育の趣意を知らずに自ら努力をしないだけでなく、酷い場合は他の人の好意で自分の子弟の教育をする人がいても、その人から受けた恩に感謝することもない人もいる。故に一国の人民の中で、知識がない者は、世の教育を助けることなく、却ってそれを妨害するものといえる。

右の次第で、貧乏で知識もない者の子供を教育するという一事は、やむを得ず他人の仕事になる。しかし、人もまた甘んじてその任務を引き受けて、その苦労を嫌がってはならない理由がある。従来から困窮者を救い罪人を罰するために払う税金は、これまでにおびただしいものがある。今人民の教育のために支出するお金は、人を貧困に陥らせず、また罪悪を犯すことがないようにするもので、いわゆる禍を未然に防止する趣旨だから、すでに貧しい貧乏人を救い、すでに罪を犯した罪人を罰するために税を納めるよりも、そのお金を使う効能ははるかに優る。故に国中で人民教育の経費を支出するのは、それを貪り食うためでなく、実は却ってその税額を減らすためである。さらに、右のように教育のために税金を集めて使うのは、悪人を罰するためではなく、人の善を助けて人を幸福にするために行なうので、たとえ名前と実績が食い違うこともあるが、その税を出した者の身になって考えると、お金を出す理由の趣意を信じて、自然と自分の心に快いものがあるに違いない。人は人の罪を罰するよりも、人の善を見る方を好まない人はいない。

ある人は、国民に無理に子供たちを教育させようとすれば、人の家事私用にかかわりそれを妨害することにもなるので、そのはからいはうまくいかない、と言う。しかしその意見は大いに違う。政府たるものは常に正しいことが行われているかどうかを観察して、国民が安泰かどうかをみて、もしそうでなければすぐ国法によってそれに関与し、処置を施さざるを得ない。罪人を罰する法も、言葉を変えて言

えば、人の私事を妨げることに他ならない。しかし今一家族の中に罪を犯す者がいて、子は父のために隠し、父は子のために隠そうとしても、法は許すことが出来ない。ゆえに、政府に人を処罰する権限があれば、また人を許す権限もなければならない。これは昔から今に至るまで金言である。刑罰は人に苦痛を与えるが、世間一般のためを考えれば、それを実施しても支障はない。ましてや教育は、その人のためになる趣旨だから、これを行うのに何の支障もあるはずがない。私ははっきり断言する。もし世間一般のためにこんな大利益を生むことがあるなら、たとえ人に苦痛を与えることがあっても、必ずこれを行うべきであると。

こういうわけで国民教育の法を設けるのは、人の不徳を改めて人を貧困から救うためのものだから、その教育を受ける者に利益があるだけでなく、この法のために費用を出す人にも、自然と利益になるものがある。しかし、全く字を知らない庶民に至るまでも、すべて政府の力で教育しようとするのは、実際にも行い難いことだから、政府はただ学校をつくって、教師になることができる人物を養成し、その他の教育のことについては、庶民では支払が難しい冗費を出すまでを責任とする。

人として高度な学問を志してその頂点に達する者がいれば、これにより世間一般の利益になることは少なくない。例えばここに一少年がいるとする。その才能に大きなことをなす力があって、大きな仕事を企てて自分から苦労をしようと望んでも、その意思を達成しようとするには、本がないわけにいかない。学術に使う器械もないわけにいかない。その他もろもろの物品を購入するための冗費もとても多い。ただしそれらの物品を買って自分に便利にして自分の贅沢をほしいままにしようという趣旨なら、外の人がそれを助けるべき理由はないが、彼がどんな苦労もいとわないと自分から決心したものなので、その心構えには同情できる。それなのに、昔から富豪の家に生まれて何不自由なく育った者にこうした大志を抱く人は、甚だまれである。少年のうちから大きな事業を企てる者は、父母から支援が得られない貧しい家の子が多いが、その志が達成できれば、国中の人々の大きな役に立つことになるので、国中の人も普段からその貧乏学生を助けざるを得ない。だから国が大学校などを作るのもこの趣旨である。大学校の中には、書庫があり、博物館があり、物理学に使う器械なども備え、貧乏学生と言えども、自由にその物品を使って志望する学業を研究できる。およそ人民教育のために、右に述べたような施設を作り、多額のお金を費やしても処置を誤らなければ、一国が繁栄するのは全く疑いようがない。

前の事柄は、もっぱら人間交際の道を明らかにし、良政府が取り計らうべきことを説いたが、やや経済論から遠ざかり、人間交際の学門ともいえるようなものだった。しかしほかにも種々の事情があって、その処置がうまくいけば、自然と人間交際を助けて、良政府の基を開き、それにより他人の幸福を増すことができるものも少なくないことは前にすでに述べた。

今ここでは経済に関することを述べる。交際の学と経済の学とはその関係がとても大きいが、一般的には、交際学の大黄な目的は、事物の道理を正し、良し悪しを明らかにし、人々が互いに親愛になり、敵視しあうことがないようにすることである。経済学が中心にすることは、人の衣食住の需要を供給し、財を増やし、富んで、人に享楽を受けさせることにある。昔の大学者が、初めて経済のことについて本を書いて、これを「富国論」と名付けた。その説によれば、人はその家法を守り節約して富を増やすので、これを大きくして一国に応用すれば、国の財を豊かにさせることが出来るという。そうはいっても、世の中の学者は、経済学をただ富を増やすものと思い、それを守るのが趣意と思うのは大きな誤解である。そもそも経済の大趣意は、人の作業を束縛するものではなく、却ってその天性に従って、自由にその力を伸ばさせるものである。故にその議論は、人間交際のことは後にして、もっぱら人間の自由な行為を抑制すると弊害が生じる理由を明らかにする。今この章では、交際の議論を終えて経済論に移ろうとするところなので、その趣旨を詳しく論じることにする。

ポリテイカル・エコノミーは、その字だけで実際の意義を尽くせない。エコノミーとはギリシャ語で家法と言う意味である。家法とは家を維持する規則で、家内全般のことを整理するという意味である。家事を整理する方法は、無益な支出をなくすのが大きな眼目で、エコノミーの文字は質素倹約の意味で用いることもある。その上のポリテイカルは国の意味だから、二つを合せてポリテイカル・エコノミーという時は、国民が家を維持する方法と言う意味になる。

経済はつまるところ一種の学問で、法術とは言えない。マックルロック氏は、経済とは物を生産し、製造し、物を積み、物を流通し、物を消費する上の規律を設ける学問で、その物は必要なものがあり、便利なものもあり、あるいは人を喜ばせる物もあり、いずれもこれを売買して価値あるもの、という。またある人の説に、この学問は資材の事情を説明し、それを生産する方法と分配する方法を論じるもの、と言う。

紙上の議論でこの学問の趣旨を述べようとしても、初めて学ぶ人には容易に判らないので、もし十分にその秘訣を知ろうと思うなら、まずこれに従事して、身近なところから学んで次第に難しい学問へ進み、次第にその議論が貴重なことを知り、段々と佳境を探るべきである。しかしこの学問へ入門する者は、予め学問の範囲を知り、議論が及ぶ境界を推し量るべきである。もしそうしないと、この学問に関係する事件と思うものも、本の中で実際には議論もなく、そのために学者を失望させることもある。そもそも経済学が主とする所は、人が需要するものの状態を説明し、それを採用する方法を明らかにし、私有物が増減する理由を論じるものだ。確かに、人の徳を明らかにして人と交わる道を修めるようなことは、もともと宗教、道徳、政治学が関係するもので、経済学ではこれを議論することはない。

右のように学科ごとに区別がある事情を明らかにするため、ここで一例をあげると次のようになる。経済学で、力で人を束縛し無理に彼を使役しても、その効果は粗雑なものになる。不羈独立で自分から富をなすという趣旨で人を元気づけ、自由にそれを働かせれば、その効果は精密で美しいものになる。故に奴隷は単にサツマイモの畑の雑草をとり、タバコの葉を取って揃えるなどの粗末な製造をする仕事には使えるが、蒸気の器械を作り精巧な機関を取り扱うなどのことは、奴隷がうまくできることではない、と言う。これから考えれば、経済学の議論は、単に人を自由に使って高度で精密な効果を生む理由を説くだけで、奴隷の悪法を非難してそれが天理天道に背く理由を弁論するのは経済学が議論することではない。

又経済学では、博打や賭は人間にとって利益はないとする。その議論では、サイコロを投げ競馬に賭をしてお金を得ても、世の中にものを生まないので、これでお金を得た者は、医、農、工、商のように他を便利にさせない。それだけでなく、金を得るために不良なことをし、ただ誰かに損をさせてそれを得るに過ぎない。さらに博打や賭けを行う間は無駄に時間を失い、無駄に心労を使い、その損失は甚だ大きい。経済家の議論はこうである。博打や賭けが悪事である理由を述べ、人心の過ちを正すことは、政教道徳の学問に任せて、これを論じない。

右の通り、経済学と他の学問の境界を明らかにするには、経済の実情を知ることが緊要だが。まずその学問へ入る入口を探し、段々その階段を経ないと、楼閣へ上って真の景色を見ることができない。学者がもしこの道に従事して次第にその真の味わいを知るようになれば、

大きな発明をすることもあるだろう。人には一種天から授かった才能が有り、今一方からその情実を見ると、偏小な私欲は卑しくて軽蔑されるべきものに似ているが、自然に従い、広く世間との交わりをさせる様子を見れば、その性情は、人を安寧と幸福に進めて、最善の徳義に到達できるように天から与えられたものと言える。例えば物を買い、物を売るという行為は、元は利益を得たいという欲から出ていて、その趣意はとても下品なものに似ているが、売買の道は、全世界中の欠乏品を供給し、余ったり不足するものを平均する方便と考えれば、ただ天から与えられた物品を世界中へ分散して人を便利にさせるだけでなく、その物品によって世の文明開化を助け、人の知識見聞を広め、太平無事に人々の交際を親しくさせることが出来る。

世界の万物をみると、日月星のように回転するものがあり、動物や植物が生まれるものがあり、地層が重なっているとはいえ、各々が一定の法則に基づき、これまでその効用を誤ることがなかったということに驚かされる。そもそも経済学でも一定の法則があるのは他の学問と同じである。その定則の一端をみると、欠点があるのに似て、これを言葉で言うのはとても難しいが、合せて一体としてその全体を見れば、善や美に覆い尽くされている。故にこの学問も、他の生物学、地質学、植物学と同様に、共に地球上の一学問で、その真理を極めると造化霊妙（宇宙の神秘な）の仁徳の様子を見るようだ。このように経済学の定則は、元は人が作ったものでなく、また人の意思で変えたり改めることもできないので、人の中にはどんな趣意でこの学問を研究するのかと問う人がいるかもしれない。私は、ただその定則を知って、それに従うためと答える。例えば、人体は自然の生理の法則に従ってその生命を保ち、健康でいられるので、その定則は人の意向で変えたり変更できない。それなのに、人が人心窮理を研究する目的は何か。ただその定則が人心の内部で行われ、その作用を活発にさせて自然なことを妨害しないようにするためである。故に、経済学を研究するのは、人が人心窮理を学ぶ趣意と同じといえる。

もし人の心が獣のようで、良し悪しの区別もわからず、ずただ天性の欲に従って事を行うならば、定則を設けて従わせようとしても無駄なことだが、人が事を行うのは必ず考えた後に行うものだ。あるいは事を行うまでの間、自然の定則を誤解して事を間違うこともある。あるいは心では知っていてわざと法を犯すこともある。今人心窮理の定則を理解する人は、空気の閉塞、糞尿の蒸発、不良な食べ物などが病気の原因でこれらを避けることを知っている。経済家もまた、人間の衣食住を整理し、人を安楽にさせる定則を観察して、もしこの定則を妨げるものがあればそれを取り除くことを知っている。殊に人の上に立って大衆を指導する者にとっては、この定則を知るのが最も緊要なことになる。例えば暴君がいて、私欲をしたい放題にして、その国の各港に台場を作って外国人が来るのを防ぎ、自国民に外国

との交際や余剰品や不足品の貿易を禁止すれば、その国が行き詰まるのは明らかだが、仁君が代って登場すれば、その妨害を取り除き、貿易の法を作って国民を塗炭の苦しみから救うことが出来る。経済学がそうさせることが出来る。ただし経済学の目的は、売買の道を保護し、それを奮い立たせて貿易を盛んにする理論を論じるものだが、それを実地に移す方法になると政治学が関わる分野になる。

経済学の定則は自然に世の中で行われている現象を理論的に説明するため、二つの例を示す。これは物品の需要と供給に関することだから、その詳しい話は下編に書く。その一例はロンドンである。ロンドンの人口二百万有余で、一日に消費する食物は牛三百頭、羊二千百二十六頭、仔羊七百頭、子牛、子豚もそれと同じ。パン十七万五千三百五十クワルトル、バター六千二百ポンド、チーズ七千ポンド、牛乳二万七千五百三十四ガロンである。仮に一日この品々が不足して、その量が半分又は三分の一に減れば、市民の困苦は言うまでもない。そのために酷い混乱が起きるだろう。しかし昔からそんな事件は起きたことがない。市民もまたそんな事件が起こるかもしれないと心配する人もいなくて、安心して暮らしている。朝八時に起きて戸を開ければ、その時刻ぴったりに暖かいパンを持って来る者がいる。もしそうでなければ外へ出て数十歩歩いてそれを買えばよい。パンを作る人は早朝四時に起きて粉を混ぜて火に置き、八時になるとパン焼きもちょうど終わり、他人の意向に合わせようと努める。蒸しパンを作る人は小麦粉を買い、小麦粉を作る人は小麦を買う。その麦はイギリスで生産したり、アメリカで生産したり、あるいは黒海や北海から来るもののある。又砂糖を購入するのは蒸しパンを買うより容易だが、その出所を探すと、熱帯地方で黒人が耕して作ったものである。茶は1万マイル離れた中国で生産されて、茶を栽培し収穫し選別し製造するのはその中国の人である。この名品を遠くのイギリスへ送って我々の日用に供しているが、その品物を使ってもそれを作る人は知らない。中国の国内の風俗はまだ詳しく知られておらず、その土人の有様は奇観ともいえるほどだろう。故に今、ロンドンの住民の一人を見て、彼が一日に飲食するものを検査し、それが来た場所を調べると、ただ一人の飲食のために、数千人の人員が世界中のあちこちに分布して各々が一部分の用を果たしている。その事情を譬えて一つの機関とすれば、「昌大精巧の妙機」と言っても言い過ぎではない。どうして人力で整理できようか。かくしてロンドンの政治を振り返ると、その政治の目的は市内の物品の需要を助けて促進するわけでなく、また供給を制限するのでもない。往くモノを止めず来るモノも妨害せず、ただ人々の自然の勢いに任せるだけである。裁判所をたてて市内の取り締まりをして人命と私財を保護し、市民同士の約束を守るために公の法律でそれを維持し、人の往来を便利にするために道を作り常に補修し、商売船を陸地に近づけて荷物の積み下ろしを便利にするために港と波止場を設けて、川には船を浮かべて陸には車を通すようにそれぞれ処置をした。これらはみな貿易の道を制限する趣旨でなく、貿易が自然の道に従て自由に事をなすことが出来る余地

を与えたに過ぎない。

第二例に、大勢の人を集めて、人力でその需要品を供給しようとした一大事件をとりあげる。昔から才知の優れた人は少なからずというが、このような大事件を計画できる才能を持ち、かつそれを実行できる威力がある人は、ナポレオン一世のほかにはいない。一八一二年ナポレオン一世は、五十万の兵を率いてロシアを攻めた時、その兵を分けて三大隊にした。そのため兵員が集まった場所はやや広くなり、ロンドンで人家が稠密になっているほどではなかった。この大軍に食料を供給するため、盛んに制度を作る人、牛羊を追いかける人、肉を捌く人、パン粉を練る人、パンを焼く人がおり、炊事夫や調理人も連れていないところはなかった。これを指揮するには、まず総督数名を決めて、次に付属士官を従え、各々に仕事を忠実に行わせて、書記官は出納を書き、監察は将兵の不正を正し、すべての法令が厳正に守られた。この一件では、ナポレオンも生涯の才力を振るったといえる。軍令の厳正さはこんな具合だったが、それでも大軍を養うには物が不足した。兵隊の中で半分以上がまだロシア国境に入らないところで、まず食料不足で進軍できなくなった。進軍して国境内へ入った者の中には、数日で餓死する者が出て、あるいは飲食が多すぎて食傷する者も出た。こんな具合で、兵糧の任に当たった者は厳罰を受け、縛り首になった者もいた。射殺された者もいたというが、最後まで食料の過不足をなくして各隊に均等に供給することは出来なかったという。これがいわゆる人為の処置で、自然な商売に及ばないということである。

スコットランドで牛羊を飼うものは、深くて険しい山や谷を越えて、ロンドンへ来てこれを売るが、その途中が最も行動を慎む。そのわけは、牛羊を守護するのは自分の利益だからである。ナポレオンの軍について牛羊を追うものはそうではない。牛羊を追って体が疲れ、あるいは連日の煩わしさにうんざりした時は、かってにこれを殺して道端へ捨て、それが腐敗するのも顧みずに去って行く者が少なくないのに、そこからわずか数十里離れた場所では、兵士が皆飢えに苦しみ、日夜牛や羊が来るのを待ちわびてほとんど野垂れ死になっている。またこちらの軍隊では、連日山海のごちそうを食べてあふれるほどの飲食をしているが、あちらの軍隊ではナポレオンが可愛がった将校さえ飢えを免れなかった。この大行軍で、フランス兵が力を失ったことは誰もがよく知っていることだ。全軍のうち、ロシアの国境へ侵入した者の多くは死傷し、生きて国境を出たものはわずか六分の一になったという。その死傷は敵兵に殺された者も少なくないが、過半は食料が不足して飢えで倒れたものである。これから考えれば、当時の一大天才で老練比類なきナポレオンと言えども、あの大衆の需要を過不足なく供給することには才能がなかったことを表している。

右の二例を見ると、経済学はもともと人のすることに関する法則ではないことははっきりしている。その学問の趣旨は、世の中で行われている自然の法則を説くだけだから、経済の定則は察地学が土地の性質を論じ、医学で病理を明らかにするようなものだ。加えてこの学問を学んで、研究を重ねるにしたがってますますその切実な真理を探り出すことが出来る。近年では経済学も奥義を極めて真理を明らかにして、世の中に役立つのは言うまでもない。人はこの学問を軽蔑して間違った説をいうものがいないわけではないが、彼らは先に知った狭い料簡に惑わされて、いまだにその真の趣旨を知らない者である。天下の事物については、無知は有知に劣り、未だに一端も舐めずに全体の良し悪しを論じることが出来るわけがない。

私有の本を論ず

私有とは、価値あるものを自分のために用い、あるいは自由にそれを処分できる権利をいう。モノは人の役に立つとても大切なものだが、その人の私有でないことがある。日光、大気などがそれである。この二つが尊いことは家財や服飾とは比べ物にならないが、人の私有物ではない。これらは自然の賜物で、万人が一緒に享受するものだから、誰も私物化できない。また政治が寛大な国では、人々がその身を自由にできる有様を指して、その人の私有と言うことは出来ない。そうした善政の下にいる人民は、自分からつくった禍によって身を束縛されない限り、一人の男として自由で安心な場所を手に入れることは出来ない。またこの道理を広げて考えれば、人の言葉に、人が行き交う道を指して、国中一般の私有と言うことがあるが、これに私有の名をつけるわけにはいかない。

私有の得失の道理を述べる者は、独り人類だけでない。すべからくこの世に生を受けたもので、自然にその性質を備えていないものはいない。鳥の巣をその私有とするのは、人の家の場合と同じである。巣は鳥の労働で作られたものである。家は人が労働して作ったものである。その得失は皆道理を基本とする。人間の私有の得失となると、事柄はやや込み入ってくるが、ことごとく天然から生まれたものばかりである。たとえ無知無霊の獣類でも大いにこれを区別するものがある。例えば犬は街道にいて労働者の衣服を守り、あるいは主人のために倉庫の護衛をする。かつまた、その犬は人のためにものを守るだけでなく、自分のためにその私有を守ることも知っている。即ち小屋の中にいる犬は、自分でその家を守って防衛する。普段から従順に従う犬でも、無理に小屋から犬を追い出そうとすると、必ずその

人の思う通りにはならない。

人類は、たとえ野蛮であっても、私有の得失を区別するのは、獣よりはるかに優れている。アメリカの土人の弓矢は私有である。土人にもし私有の区別がなくてその弓矢に決まった所有者がいなければ、誰が苦労して自分で弓矢を作るものがあろうか。だから開闢の初めから、私有の道理は人が自然に知っていたもので、人が何もせずに手に入れられないものを努力して作らせてその産物を手にしているのである。野蛮な人民が弓矢で野獣を捕まえれば、その私有になり、肉は食し、皮は衣服を作る。また、物が私有になると、これを他人に与えることが出来る。野蛮人の弓矢は、これを子弟に伝え、あるいは他人へ与えることも支障がない。また或は、この弓矢で他人の私有物と貿易することもある。航海者が新しい国土を発見すると、その土人は獣の皮を携えて船へ来て、船中の衣服や真珠や玉と交換することを知っている。

野蛮人は、手に弓矢を持ち体に獣の皮を着るのは、それが私有品で、これを携えたり着てどこの土地を徘徊しても、他の野蛮人もその品物をその人の私有と見做して怪しむ気色もない。又雨露をしのぐために小屋を建てる時は、その小屋を持って動くわけにいかず、かつその身もいつも小屋の中にはないが、それでもなおその小屋はその人の私有である。それだけでなく、土地を開墾して芋を作れば、その土地はこれを開墾した人の私有になる。キャプテン・クックがニュージーランドを発見した時、その土人の有様を見ると、無知で愚かでかつ殺伐としていて人肉も食ったという。しかしながらその田園では垣根を作って各々所有者がいたという。また、未開の野蛮人が私有の区別を知っていることをさらに詳しく示すものがいる。アメリカの土人は、各々群れを作って一群ごとに決まった猟場があった。もともとそこは自然の山野で、囲いがあったわけでもないのに、自然と境界を決めて、その群れが私有する猟場に、別の群れが来て猟をすることを許さなかったという。

文明の人民では私有の区別は一層頻繁かつ複雑になる。自分の衣服が自分の所有であるのは自分で着てみればはっきりする。時計、財布、小刀、簪も自分の懐にあれば自分の所有物で、人もそれを見て私の所有であることを認める。街中で人の懐の中を盗み取るものがいれば、巡査や道端の人に、これを見て泥棒としてすぐに捕まえることができる。時計、財布は、身につけて動かすことが出来るが、家具や書画などは身につけていることが出来ず、いつも家に置くために、これらのものはその家に住む人の私有となる。外の人がもし力でこれを奪

おうとし、あるいは騙してこれを取ろうとする者がいれば、これを防がないではいられない。これは街を見回る警察官の仕事である。

私有に二種類の区別がある。一を移転、一を遺転と言う。移転とはここからあちらへ移動するものをいう。金銭、商売品、家具、書画などがそれである。遺転はその場所を動かさずに他人へ残して伝えるモノを言う。土地や家宅のようなものである。かつこれを遺伝するには政府の法律がある。移転品はその持ち主が明白なので、それを守るのは難しくない。前にも言ったように、人の懐にある財布はその人の財布であるのは疑いようがない。

土地や家宅の類は、その持主の持主たる証拠を示すには移転品のようにはっきりしにくい。家を買って代金を払っても、終始その家にいてそれを守護することもできないし、またこれを手に持って動くこともできない。故に国の法律で種々の証券を作り、金を出して買い取った家は実際に買主の私有であることを明らかにする。この証券をタイトル・ヂーヅと名付ける。この証券があれば、土地家屋などを買った者も、これによって自分の私有物であることを守護し、あとになって支障が生じる心配もない。さらにこの遺伝をしっかりさせるために、スコットランドやその他の国々では、タイトル・ヂーヅの証券を国中に布告する図書に付属して付けることがある。こうすればたとえ証券を失くしたり焼失しても、そこの布告書を以て証拠とし、私有を失うこともなくなる。

土地家屋などの持主定めるには、事はやや煩雑になって、はっきり区別が判る詳しい証書を用いなければ、その事情が十分でないことがある。例えば三，四人で一軒の家を持つ場合がある。もともと家は三個四個に切り分けられないものだから、自然とその中の一人はその一部分の主人である。また土地を担保に金を借りる時は、土地の本来の所有者ではないが。一時的にその土地を支配できる主人になる。ここに一人の金主がいて、また一人の地主がいて、金主が地主に金を貸しても、土地を買うことを望まず、あるいは地主も土地を売ることを望まなければ、互いに契約を結んで、今はこの土地をすぐに引き渡すことはないが、後日借金を返さないときはこれを引き取ることが出来る旨を定めたために、金主はいわゆる質物を預かることになる。地主が一旦その土地を質入れする時は、他と契約して先の金主を欺くことは出来ない。その詐欺を防ぐものは国法である。

また、国債の元金を私有財産とする者がいる。その法は次の通りである。国がしばしば戦争すると、政府の借金もまた増加する。これを

国債と言う。この国債を償うには国内の税金を充てるほかに方法はないが、その金額が非常な大金で、一時的な税金を集めてもまだ足りないために、法律を定めてその利息だけを払って、元金は毎年少しづつその一部を返すだけにする。故に国民は、私有する金を払わずただ利息だけを得ようとすると、その金を政府に貸して国債の中に入れる。これが国債の元金を持つということである。このように政府はただ利息を払うだけで、必ずしも元金を返さないが、最初に元金を出したものが一時的に金を得たいと望めば、元金を持っている名目を他人に譲って現金に変えることもできる。

商人が会社の元金を家産とするのは、一種の別法による。普通の人が会社をつくり、鉄道を作り。港を作り、市場を開き、両替屋を作り、水道を引きなどの大事業を計画する時は、国中の人が始めに元金を出し、事業がうまくいって利益が出るようになると、その元金の大小により利潤を分配する。商社の元金を持っているというのはこの事である。法律はいろいろあるが、一般に元金所持の名目は、子孫に伝えあるいは他人へ売ることが出来るので、他の物品と異ならない。ただしその名目は、手から手へ渡すことが出来る実物ではないので、これを授受するには証書がないわけにいかない。

私有の種類に、更に一層の美を尽くし、煩雑かつ精密なものがある。即ち発明の免許蔵版の免許などがそれである。国法の趣旨は、人の私有を保護し、その労働を助けるためのものである。世の中に新発明があれば、それが人間に莫大な利益をもたらすのは言うまでもない。故に有益なものを発明した者には、政府から国法によりいくらかの時限を決めて、その間は発明で得る利潤を一人その発明家に付与し、それにより人心を奮い立たせる一助にしている。これを発明のパテント（特許）と呼ぶ。例えばここに一人の紳士がいて、水が漏らない布を発明すれば、国法により一定期間中は独占的にその布を作って利益を受けられるという免許を受けて、この免許を私有財産とする。そもそも独占的に物を作ってその利益を独占するのは、利益を独占して他人に損害をさせるのに似ているが、その発明により世の中の利益が大きいゆえに、世間のために考えてもその取得は損を償ってもはるかに余りある。又本を書いて図を作る者も、これをその人の出版の権利として、独り利益を得る免許を受けて、私有の財産とする。これをコピーライト（出版の免許）と呼ぶ。

勤労に別あり功験に異同あるを論ず（略）

発明の免許（パテント）（略）

出版の免許（コピーライト）（略）

私有を保護すること（略）

私有の利を保護すること（略）